

## 《シンポジウム》

## 2013 年度シンポジウム司会報告

## 司会 土橋 茂樹

上述の企画趣旨に示されたように、2013 年度シンポジウムにおいては、ギリシア古典期から 12 世紀に至るまでのおよそ 1500 年間の視野に入れることによって、「自由学芸」の理念の形成・展開・変容の経緯をでき得る限り詳らかにすることが意図された。実際、自由学芸（自由七科）という伝統の形成をめぐることは、これまでもアウグスティヌスやカロリング・ルネサンス期など、特定の思想家、特定の時代の研究に充実した成果が見られたものの、時代や地域を異にする自由学芸教育の多様な実態については、従来あまり扱われてこなかったように思われる。そこで、今年度のシンポジウムでは、13 世紀の大学成立以前、つまり教育プログラムの制度化以前に、自由学芸という教育理念が実際にどのような形で各時代において実践・展開されていったかを、さまざまな時代のテキストを最新の研究成果も織り込みながらできるだけ具体的に読み解いていくことによって、フロアとのより実質的な討議に資するための多様で斬新な観点を提供できるようにするという戦略が採られた。

具体的には、まず納富信留氏による第一提題「古代ギリシア・ローマにおける〈哲学〉と〈弁論術〉の教育」において、「エンキュクリオス・パイディア」という概念を介して「自由学芸」の起源をギリシア古典期に遡り得るとする従来の通説に対する疑念が示された上で、より具体的に「三学」「四科」の古代末期に至るまでの展開が見通しよく跡付けられた。とりわけ、三学に関しては、ソフィスト起源の「弁論術」<sup>レトリケー</sup>を批判し「ディアレクティケー」を哲学の要とみなしたプラトン哲学との齟齬が指摘された一方で、さらにフロアからは、アリストテレスによってロギコースに理論化されながら、エンドクサに依拠してディアレクティコースに実践された

ディアレクティケー

「弁証論」の重層的方法論の後代への影響が問われ、さらにはイスラーム世界に伝承された「弁論術」「論理学」「弁証論」相互の位置付けの問題とも絡んで、今後解明されるべき重要な課題が浮き彫りにされたように思われる。

続く第二提題との間には時代的に大きな隔りがあるが、その溝を埋めるべくなされた水落健治氏による連動報告「初期アウグスティヌスと自由学芸——『書簡 26』収録のリケンティウスの詩を中心に」および同氏による資料「マルティアヌス・カベラ『フィロロギアとメルクリウスの結婚』」、さらに当日会場に配布された周藤多紀氏による資料「ボエティウスと自由学芸」および土橋による資料「東方世界における自由学芸の諸相」によって、4世紀から6世紀にかけてのラテン世界ならびにアレクサンドレイアのフィロンからビザンツに至るまでの東方世界における自由七科の歴史的展開が必要な範囲でほぼ通覧できたものと思われる。結果的にそこから抜け落ちたカロリング・ルネサンス期の自由学芸に関しても、フロアとの討議の際に、清水哲郎氏からカシオドルスおよびイシドルスによって準備されアルクイヌスによって結実した自由学芸（世俗の哲学）とキリスト教化した哲学（「真の哲学」）との関係を中心に補足がなされた。

水落報告は、アウグスティヌスのいわゆる「カシキアクムでの自由学芸」を検討するにあたって、当地で共に過ごした弟子のリケンティウスが彼に送った詩とそれに対するアウグスティヌス本人の返事を読み解くことによって、従来の研究とは異なった視点を提供しようとする意欲的な試みであり、ウェアロ、リケンティウス、マルティアヌス・カベラの側から当時のギリシア起源の自由学芸のありように光を当てるものであった。その結果、フロアとの討議においても、リケンティウスに数多く見出される異教的モチーフとキリスト教信仰との間にアウグスティヌスが抜き去りがたい緊張を感じ取ったのかどうかという点が問題となった。

続いて、矢内義顕氏による第二提題「カンタベリーのアンセルムスと自由学芸」において、11世紀の修道院における自由学芸のありようを、アンセルムスがそこから読み取ることのできたテキスト源泉、自由学芸に対する彼の基本姿勢、さらに彼の著作中にそれがいかに活かされたかという3点から詳細に考察された。ここでもまた、世俗の知である自由学芸とりわけ弁証論理学ディアレクティカの使用に関して、信仰の否定ではなくその理由の探求に限定するという慎重な姿勢が強調された。また、アンセルムスの唯一の論理学的著作である *De Grammatico* の弁証論理学研究に占める重要性の再評

価という論点に絡めて、フロアから *significatio* 研究から見たその意義についても指摘がなされた。

最後に、永嶋哲也氏による第三提題「エロイーズ書翰に見る中世修辞学としての書翰作文術」においては、まず大学の黎明期である12世紀における自由学芸の受容状況一般がアベラールに即して概観された上で、もっぱら論理学研究に特化しがちな当時であって、説教術と並んで修辞学の主たる実践とみなされていた中世独自の書翰作文術に関する興味深い紹介がなされた。世に名高いエロイーズとアベラールの往復書簡に駆使されている当時の修辞的技巧に顕著に見られるように、もはや修辞学は演説中心の古代修辞学から書翰作文の修辞学へと大きく様変わりしていたと言えよう。このことから明らかに見て取られるように、自由学芸全体の位置付けも大きく様変わりしたのではないかというのが氏の見立てである。

以上の報告や提題を踏まえ、さらに来年度のシンポジウム後半をにらんで、フロアからは教養教育という理念そのものをめぐる根本的な問いが投げかけられた。現在のリベラルアーツ教育概念が直接、ルネサンスの人文主義に遡るとして、ではそこに中世の自由学芸の伝統はどのように関係しているのか。単なる専門的職業人教育にとどまらない全人的知性の開発、およびそれと相即不離な社会的エリート養成という側面をもった近代における大学の教育理念に、「キリスト教的リベラルアーツ」や「世俗的リベラルアーツ」といった形で中世から継承されたものが果たして存するのであろうか。このように普遍性の高い問いを、今回さまざまな形で提示された具体的領域の一つ一つに分け入り問い直すことこそ、この主題に取り組む者すべてにとって必須の課題であり、そのことがとりもおさず、来年度への大きな橋渡しになるものと願わずにはいられない。

---